

# 实践源文学

-Practice of GENBUN-



BloodyWorks Presents



## 地図から見る独ソ戦（上）

東部戦線 第二次世界大戦におけるドイツ軍とソ連軍の戦いは小林源文作品の最もメジャーな題材であり、これまでドイツ陸軍の将兵達を主人公にした多くの作品が発表されてきました。その内容は代表作である「黒騎士物語」に代表される架空の人物を扱ったものから「炎の騎士」のような実在人物・部隊を中心に置いた戦記物まで幅広く扱われていますが、その中でも「バルバロッサ作戦」に始まる東部戦線四部作は視点を一つの人物や部隊に固定化せず、時系列に沿って東部戦線そのものの戦場を描いていった最も戦記色の強いシリーズです。

この「バルバロッサ作戦」「タイフーン作戦」「ブラウ作戦」「ツィタデル作戦」の四部から構成される本シリーズは歴史群像に連載されていた物を単行本化した形になっていますが、実のところこれらの作品には原作ともよべるものが存在しています。

各物語で描かれる戦場は基本的にパウル・カレルの著書「独ソ戦史 バルバロッサ作戦」及び「焦土作戦」(共に上・中・下三巻構成、版元は学研M文庫)の記述を基に描写されており、登場人物や戦闘の推移、台詞回しなども多くがそれに準じたものになっているのです。

この「バルバロッサ作戦」と「焦土作戦」は元ドイツ軍情報将校であるパウエル・カレルが第二次大戦に従軍した膨大な数の元ドイツ軍将兵達(上は大将から下は一兵卒まで)からの情報提供を元に書き上げたドイツ陸軍視点での独ソ戦記本の決定版と呼ぶべき傑作であり、そのような特性からも判るとおり全篇がドイツ軍前線部隊視点、「勇敢なドイツ陸軍前線将兵と強敵ソ連軍の死闘」というスタンスで物語が描かれています。文中では軍上層部と政府、ナチ党中枢のドロドロとした抗争や異民族虐殺、現地住民からの略奪の仕合といった戦場の暗部は極力省かれており、読んでいて非常に清々しく手に汗握る「スポーツマンシップに乗っ取った」戦記となっているといえるでしょう。

小林氏によって劇画化された東部戦線シリーズも完全にこの流れを踏襲しており、物語的な山場や特定の主人公も無く無数の兵士達が泥の中で戦うシーンが延々と続いていくという硬派な展開となっています。これはパウル・カレルの作品の画像化としては文句の付け所のないものではありませんが、原作を読んで

いてさえ話の流れが非常に理解しづらくなっているのも確かです。と言うよりも、ただ目で追って読むだけでは話の展開が頭に残る事さえ至難。

そこで今回は東部戦線四部作の流れを解体し、時系列に沿った地図を添える形で再構築することによって同シリーズの完全な理解を目指してみることしましょう。



## バルバロッサ作戦

1941 年 6 月 22 日早朝、アドルフ・ヒトラーとドイツ陸軍は初動兵力として 150 個の各種師団（含む武装親衛隊、ルーマニア軍師団）を準備し、320 万の兵員をもってバルバロッサ作戦に臨んだ。軍レベルにおける戦略配置図では中央軍集団の担当戦線がやや手薄なように感じられるが、実際には最も多くの師団の配されている中央軍集団に穴は無く、独ソ国境線上には北方から隙間無く数珠のように各種師団が並んでいた。

バルバロッサ作戦における主な戦略目標は北方軍集団による要港レニングラード（現サンクトペテルブルグ）確保、中央軍集団による首都モスクワ占領、南方軍集団によるウクライナ工業地帯並びにコーカサス油田の占領となっている。そしてこれらの地域を制圧した後、最終的には白海のアルゲンハリスクからカスピ海のアストラハンを結んだライン（通称 A = A ライン）まで進出し、そのライン以西をドイツの勢力圏として確定することとなっていた。

なお簡略化のため、この表にはバルバロッサ作戦開始時に国境線沿いに展開していた軍団レベル以上の初動攻撃部隊のみを記載している。実際には東部戦線に配備された全師団の三分の一が軍予備、軍集団予備、OKH（陸軍総司令部）予備といった形で予備兵力として待機しており、更に作戦開始後には同盟国軍としてルーマニア軍二個軍、イタリア軍一個軍、ハンガリー軍一個軍、フィンランド軍二個軍がドイツ軍の指揮下に入っている。

この配置を見て判るように北方軍集団の第 18 軍から南方軍集団の第 17 軍までは独ソ国境 分割された前年までのポーランド領内に並んでおり、そこからハンガリー領を超えたルーマニア領内には第 11 軍（半数がルーマニア軍師団、他にルーマニア 3・4 軍も同行）が待機している。一つの軍団はいずれも通常二つから五つの師団によって構成されているから、配備された師団の密度から見ても主攻正面が独ソ国境であることは間違いない。

実際にドイツ参謀本部が立てた対ソ作戦の基本はソ連の中枢であるモスクワを電撃的に占領してソ連軍の指揮系統を麻痺させることを第一としており、中央軍集団はその実現のために二つの装甲軍集団を配備されモスクワへの道をひた走る事になっていた。

北方軍集団(レーブ元帥)		
	第18軍 (キュヒラー上級大将)	第26軍団 第38軍団 第1軍団
	第4装甲集団 (ペプナー上級大将)	第41装甲軍団 第56装甲軍団
	第16軍 (ブッシュ上級大将)	第10軍団 第28軍団 第2軍団
中央軍集団(ボック元帥)		
	第3装甲集団 (ホト上級大将)	第6軍団 第39装甲軍団 第5軍団 第57装甲軍団
	第9軍 (シュトラウス上級大将)	第8軍団 第20軍団 第42軍団
	第4軍 (クルーゲ元帥)	第7軍団 第13軍団 第9軍団 第43軍団
	第2装甲集団 (グデーリアン上級大将)	第46装甲軍団 第47装甲軍団 第12軍団 第24装甲軍団
南方軍集団(ルントシュテット元帥)		
	第1装甲集団 (クライスト上級大将)	第14装甲軍団 第3装甲軍団 第12軍団 第48装甲軍団
	第6軍 (ライヘナウ元帥)	第17軍団 第44軍団
	第17軍 (シュチルプナーゲル大将)	第4軍団 第49軍団 第52軍団
	第11軍 (ショーベルト上級大将)	第11軍団 第30軍団 第54軍団

これに対しソ連軍部隊の重心はソ連の工業地帯であるウクライナ方面 南方軍集団の正面に置かれており、独ソ両軍の部隊配備は開戦前から奇妙な食い違い現象をみせていた。これは一説にはソ連自体が先制攻撃によるバルカン方面(ドイツのアキレス腱であるルーマニア油田)侵攻を狙っており、そのために部隊の集結を始めていた為とも言われている。

なお今作品の展開はパウル・カレル「バルバロッサ作戦 上」の一章「奇襲成功す」冒頭から七章「タイフーン作戦」の中ほどまで軸に、「バルバロッサ作戦 中」のレニングラード戦とクリミア戦の一部(時系列的には開戦

からタイフーン作戦開始まで)を混ぜ合わせたものとなっている。

## 奇襲成功す 開戦～ブレスト要塞攻略戦

【バルバロッサ作戦：P.11-52】

バルバロッサ作戦の物語は、独ソ国境線であるブーク川から四キロの森林中に展開する装甲教導連隊第四中隊の少尉と曹長の会話から始まった。彼らのより具体的な所属は中央軍集団 第2装甲軍集団 第47装甲軍団 第17装甲師団 第39装甲連隊 第三大隊 第四中隊、独ソ戦の華となったグデーリアン指揮下の装甲部隊の一員である。なお「バルバロッサ作戦」作中における中央軍集団の描写は殆どが第2装甲集団を対象にしたものになっており、これ以降の場面でも第2装甲集団に属する各種部隊が頻繁に登場する。

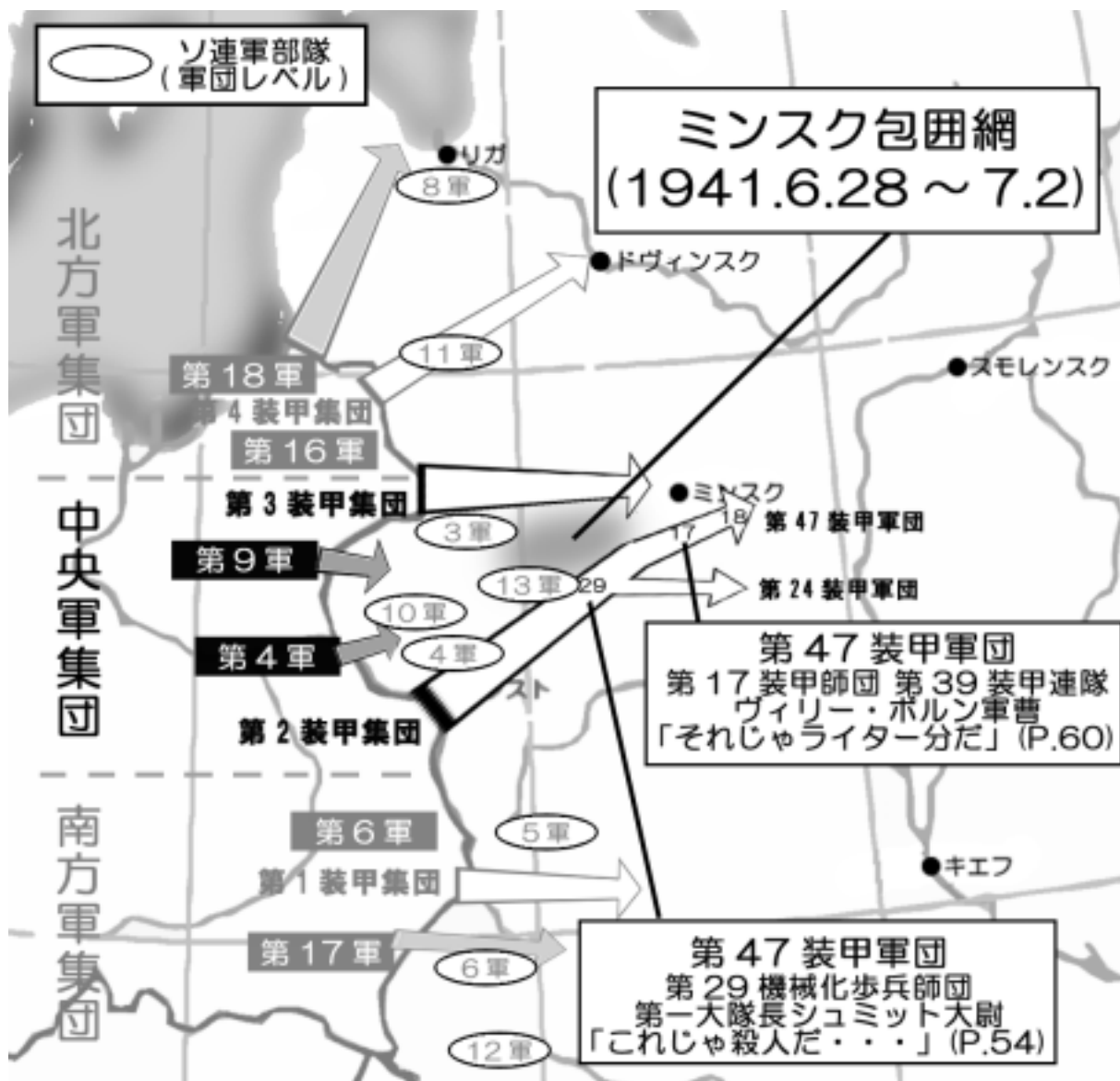
そして1941年6月21日夜、300万の兵員が彼らと同じ開戦命令を伝えられ、六時間後の開戦と共に一斉に行動を開始した。

国境をブーク川によって阻まれている中央軍集団の各部隊は橋を奇襲占領し、またある部隊はゴムボートで強行渡河することによって進撃手段を確保、ソ連領内に攻め入った。その中には第18戦車師団のように水中装甲能力を付与された三号潜水戦車を投入し、強引に渡河を強行した戦車部隊すらも含まれている。特に第2装甲集団の前途にはブレスト要塞が待ち構えていたが、グデーリアン上級大將は第45師団に要塞の包囲を任せ、自らは残りの装甲部隊と共に前進を継続した。全般的に見て中央軍集団は戦略的奇襲に成功しており、進撃速度は速かった。



北方軍集団の状況も悪いと言うほどでは無かった。開戦三日目ごろから幾らかの抵抗があったものの、第 56 装甲軍団のマンシュタイン将軍が「側面など何だ、進め！進め！」と急かして（作中 P.30）までに重要視したアリョーガラ  
の橋は無事確保することができたからだ。

これに対し、ソ連軍の配置の重心が存在する南方群集団は開戦第一日から激戦に巻き込まれていた。奇襲は国境線上の警備部隊に対してしか通用せず、第 17 軍団のある歩兵連隊は一日中ライ麦畑で白兵戦を繰り広げた（作中 P.26）ほどである。こうして時計の針が狂ってしまった南方軍集団は、ソ連軍防衛部隊の頑強な抵抗を一つ一つ潰しながら、一步一步ドニエプルに向かって前進していくしかなかった。





## 救世主を探すスターリン ミンスク包囲網

【バルバロッサ作戦：P.53-66】

6 月末、ドイツ軍は最初の大勝利をあげようとしていた。ブーク川屈曲部より発進した中央軍集団の二つの腕、グデーリアンの第 2 装甲集団とホトの第 3 装甲集団によって側面を切り取られ、ソ連軍西方特別軍管区（司令部ミンスク）に展開するソ連四個軍が丸々包囲殲滅されようとしていたのだ。

緒戦の混乱を利用してソ連領内を突進したホトとグデーリアンの装甲集団はミンスクで会合し、そこで巨大な袋の口が閉められた。もちろんソ連軍は強度の低い部分から脱出を図ろうと絶望的な抵抗を止めなかったが、結局はドイツ軍の包囲網を破ることはできなかった。開戦から 10 日で四三個師団、三十万人の兵力が消滅した。

しかしこの時点で既にソ連領内の劣悪な道路整備網がドイツ機械化部隊の足を引っ張り始めており、早くも前線部隊は補給や輸送に困難を覚え始めていた。ミンスク地区における燃料補給の遅延（作中 P.60）や道路の利用権を巡る部隊間の争い（作中 P.62）はその最たるものである。

## 作戦目標スモレンスク スモレンスク攻略戦

【バルバロッサ作戦：P.67-78】

ミンスク包囲網の完成が確定的になったグデーリアンはここで満足せず、包囲網を歩兵師団に任せながら装甲部隊による更なる進撃を継続しようとしていた。次の目標はスモレンスク。モスクワへ至る街道の第二関門である。

まず彼は第 18 装甲師団のネーリングに命じボリソフを確保させようとした（作中 P.67）。そこはモスクワ街道がベレジナ川を渡る地点であり、スモレンスクへ向かうためには絶対に確保しなければならない要衝だった。

しかし後方部隊はミンスク包囲網の維持にかかりきりになっており、師団は全くの独力で百キロ前進して目標を確保しなければならなかった。その困難さ・危険性はネーリングが後年になっても「あれは天国行きの任務（昇天命令）に等しかった」と語り草にするほどであったという。